

**中村 修氏** 中村(株)会長、元四国タオル工業組合理事長

中村修氏が会長を務める中村(株)は、1905年に中村氏の祖父・梅造を含む中村家の5人兄弟が設立した中村合名会社を前身に持つ。5人兄弟のうちの末っ子が、今治タオルの中興の祖のひとりである中村忠左衛門である。中村氏は、1974年に同社の社長に就任し3代目を継承。それ以来経営者として采配をふるってきた。それだけではない。四国タオル工業組合（現・今治タオル工業組合）の青年部会時代の活動は時代を先取りしたものであり、矚目に値する。また1987年9月から1993年4月まで同組合の理事長を任され、先人たちの教えを継承しながら、組織を束ねてきた。現在は第一線を退いているが、組合の一員として今治タオルの行く末を見守っている。



中村 修氏



---

なかむら・おさむ ☆ 1934年11月、今治市蒼社町生まれ。1941年尋常小学校（国民学校初等科）入学、つづいて1947年今治市立日吉中学校入学。その後、1950年に愛媛県立今治西高等学校に進んだが3年生から成城学園高等学校に編入し卒業。1953年学習院大学経済学部へ進学したが1ヶ月で中退し、翌年早稲田大学商学部に入學。同大学卒業後、1958年に事務用品を販売するオート(株)に入り営業職に就く。1962年、帰今して中村(株)に入社し、1974年に同社3代目社長に就任。1988年四国タオル工業組合理事長（～1993年）、1990年今治繊維リソースセンター社長などを歴任。1995年藍綬褒章、2006年旭日双光章を受章。


## 1. 青春時代


### マネジメント能力は高校の野球部時代に培われた

中村修氏は、1934年に今治市蒼社町に父・勝政<sup>かつまさ</sup>氏と母・幸枝<sup>さちえ</sup>氏との間に2男4女の長男として誕生した。父方の中村家は代々農業を生業にする地主であり、祖父の梅造のときにタオルメーカーを立ち上げた。父の勝政氏は、中村株式会社の2代目にあたる。母方の神谷家も農業を営む地主であり、中村氏は神谷家にとって初孫だったため、神谷家によく連れられ、たいそう可愛がられて育った。




3歳のときの写真

1941年に尋常小学校、厳密には国民学校初等科  に入学し、戦争で勉強どころではなかったが、大好きな野球を始めたのはこの頃である。中村氏と野球との出逢いはごく自然に訪れた。当時人気のスポーツであった時代背景もあるが、何より父の勝政氏が松山商業の卒業生であり、しかも現在の全国高校野球選手権大会に匹敵する全国大会（鳴尾球場）に4年連続出場を果たした経験を持つ野球少年だったことが影響している。

小学校6年生のときに終戦を迎え、1947年に新制中学校  の第1期生として今治市立日吉中学校に入学した。高校は愛媛県立今治西高等学校に入り、野球部に所属した。タオル屋の息子で商売っ気があろうという理由から野球部では2年生のときからマネジャーに任命され、野球部に割り当てられた年間活動費の10万円をやり繰りしながら、野球用具の調達や遠征の段取りなど外部との交渉を

一手に任された。当時は野球用具ひとつ手に入れるにも容易ではなく、高校生ながら販売店の店主と対等にやり取りしなければならなかった。ある店主には、「お前んとこの親父の顔を立てて売ってやろわい」と言われ、ようやく野球用具を入手できたこともある。また、チームが遠征に行くときは、1円でも安く切符を購入するために旅行会社を転々と回って情報収集し、一所懸命に赤字にならないように苦心した。しかし、マネジャーの経験をとおして身に付けた交渉術は、のちの中村氏の糧となった。

一方で、野球一筋の中村氏は、勉強をいつも後回しにしていた。2年生も終盤に差しかかる頃、高校の先生から「お前、今のままの成績じゃ、大した大学に行けんぞ。もっと勉強せい」と言われ、ここで心機一転。中村氏は、「いっそのこと東京に行つたれ」と思い立ち、編入試験が受けられる高校をいろいろと探し始めた。都立高校の編入試験はすでに終了していたので私立に絞った結果、3年生の春に成城学園高等学校への編入が決まった。高校生ながら思い切った決断であったが、この決断がのちの早稲田大学入学へと繋がり、父親の若かりし頃の夢を息子が実現することになる。

成城学園高等学校に編入してもっとも印象的だったのは、教師陣の顔ぶれと授業内容であった。とくに英語の授業では、地方との差に愕然とした。中村氏が教わった英語教師の小野嘉寿男  先生は、当時大学受験ラジオ講座を担当していた人で、英語発音から教え方まで何から何までレベルの高さに驚かされた。その先生がたまたま高松出身だったので、「中村くん、今治出身か。しっかり勉強しなさい。何でもわからないところは聞きに来い」と言って、関西弁を話す中村氏のことを何かと気にかけてくれた。


成城学園高校への編入直後、中村氏は田園調布の親戚の家に身を寄せていたが、六畳一間に夫婦と子供一人が暮らしていたところに中村氏が転がり込んだため勝手が悪く、しばらくして成城学園にほど近い経堂駅周辺にアパートを借りて一人暮らしを始めた。当時の経堂駅近辺は麦畑が広がり、長閑な田園風景だった。それでも都会

らしいところもあり、成城学園の徒歩圏内に東宝スタジオがあった。



成城学園高校のときの中村氏

中村氏は、何度も撮影所を覗きに行き、今治ではできない貴重な経験を楽しんだ。



毎日の食事は外食で済ませることが多かったが、食堂で米を食べるには外食券  が必要だった。外食券は下宿している住所に戸籍がないと発券されず、また大学に入学するにも戸籍の移動がないと許可されなかったため、日頃から戸籍謄本を所持して下宿が変わるたびに移していた。休みの日には、

現在の地下鉄の上を当時は路面電車が走っており、通称ちんちん電車に乗って新宿の歌舞伎町へ遊びに行ったり、アメリカ軍が接收していた土地に現在の伊勢丹新宿店が一階ずつ返還されるというので友だちと見物に出かけたり、今おもえばどれも戦後復興をへて間もない1950年代の懐かしい思い出である。

## 父親が憧れた早稲田大学へ入学

成城学園高等学校を無事に卒業した中村氏は、1953年に学習院大学経済学部に入學したが、1ヶ月で中退した。その理由は自分の肌に合わず、中村氏には面白味に欠けた。そこで、大学受験をやり直し、翌年の1954年に早稲田大学商学部に入學した。早稲田での生活は学生時代でもっとも刺激的であり、青春を謳歌できた。野球はプレイヤー（選手）からウォッチャー（観客）に変わったが、野球好きは相変わらずつづき、早慶戦になると血が騒いだ。今でもそれは止むことはない。

学業面では、知的好奇心を駆り立てるような講義をたくさん聞く

機会に恵まれた。当時商学部で教鞭をとっていた先生のなかでも、とりわけ北沢新次郎  先生の講義は毎回刺激に溢れ、1コマ100分の授業があつという間に過ぎ、一度もつまらないと思ったことがなかった。中村氏は、北沢先生にいちどその面白さの理由を聞いたことがある。すると北沢先生は、「若い頃、どうしたら学生たちが飽きない授業をできるかと懸命に考え、しばらく新宿末廣亭  に通い、落語家の噺を徹底して研究した」と答えてくれた。それには中村氏も感心したことを今でも鮮明に覚えている。

また、北沢先生の講義では夏休みに論文執筆の課題が出され、中村氏は中村（株）の戦中の経験をテーマに論文を仕上げた。戦争がいかに悲惨なものか、戦争によっていかに民間企業が犠牲を強いられたかなどについて論文に記した。かいつまんでその内容に言及すると、中村（株）の工場が立地していた蒼社川周辺はアメリカ軍の爆撃対象になるから山のなかに疎開工場をつくるように国から指導され、学徒動員の学生たちの手により大谷墓地近くに工場建設が計画された。ほぼ完成の状態ですべて喪失し、会社はまったくのゼロから自力での復興を余儀なくされた。北沢先生は、論文の一字一句に丁寧に目を通し、細かいところまで赤字で修正してくれた。論文に関する感想のなかの「がんばれ」という言葉が、中村氏の胸にしみついて残っている。北沢先生の他にも、宇野政雄先生や鳥羽欽一郎先生など日本の各学問分野を牽引してきた有名な



早稲田大学1年生のときの中村氏（右）とホニージャックスのメンバーの西脇久夫氏（左）。西脇氏はいまでも現役で活躍中。

先生の講義を聞いたのは、中村氏にとって幸せであった。


大学時代も下宿先を転々とした。文学部の建物の地下に生活協同組合（生協）があり、そこで逐次下宿先を斡旋していた。うまい具合にちょうどいい1軒家の物件を探し当て、地方出身者3人と共同



早稲田大学の大隈講堂と大隈重信の銅像

生活を始めた。今で言う、シェアハウスである。しかし、3人のうちの1人が勉強熱心な友だちで、あまり勉強をしない2人に愛想を尽かして「もうお前らと一緒に居れん」と言って出て行ったのをきっかけに下宿先を移転した。最終的に落ち着いたのが穴八幡宮の裏側にあった新築のアパートだった。2年生のときに妹が武蔵野音楽大学に通うため上京し、音楽大学の近くの

江古田に引っ越しをしてきたので、小遣いに余裕があるときは早稲田大学近くの高田牧舎や三朝庵などに行って食事をしたが、小遣いが底をつくとも妹の家に行って食事をつくってもらっていた。これも青春時代の思い出である。

1958年、早稲田大学を卒業後、新宿の小滝橋にあるオート(株)に就職した。同社は事務用品を扱う専門商社であり、中村氏は営業に配属された。静岡や北陸3県などを担当し、愛知に新しい事務所を設置する際の責任者となったが、ちょうど伊勢湾台風  が襲来しこの話は頓挫してしまった。こうして4年間、中村氏は同社で営業を経験し、1962年4月の27歳のときに帰郷した。喘息持ちだった父親が体調を崩したことも帰郷の契機となり、実家の中村(株)に入社した。

伊勢湾台風と今治タオルの関係について追記しておく、伊勢地

方も日本を代表するタオル産地のひとつであったが、伊勢湾台風で多大な被害を受けたため、このとき今治産タオルが大量に売れて在庫が<sup>ゼロ</sup>になった。ある種の特需であったが、同時に被害を受けたタオル工場が水浸しになって稼働できない状態となり、今治から何人ものタオル関係者が派遣されて救助活動をおこなった。今までタオル産地同士の交流は皆無に等しかったが、これをきっかけに交流が始まった。

伊勢への救助活動をとおして、今治にとってもプラスの出来事があった。今治のタオル関係者が伊勢の最新技術を目の当りにして、「今治も伊勢に倣ってもっとがんばらないかん」と危機感を抱いたのである。伊勢での経験がどこまで影響したかは定かではないが、その後間もなくして今治は日本一の生産額を誇るタオル産地へと成長していった。（次号につづく）

